入選（低学年の部）

ぼくの自慢のお姉ちゃん

埼玉県　川口市立安行東小学校 三年

鈴木（すずき） 紫文（しもん）

　ぼくの家には金色に光るトロフィーが何本も並べてある。全部、ぼくの六才上のお姉ちゃんがピアノのコンクールでもらったものだ。ぼくはそのトロフィーがうらやましくて、ぼくももらえるようにピアノをがんばっている。でも、メダルはもらえても、トロフィーは手に入らない。練習していても、難しい曲ばかりでなかなか上手に弾けない。ぼくの練習中、

「お姉ちゃんはできないところがあると、二百回ぐらい弾いていたぞ。」

と、お父さんが言えば、

「正の字をノートに書いて、何回弾いたか数えていたね。」

と、お母さんも言う。そして、

「そんなときもあったねぇ。」

と、お姉ちゃんが遠い目をして言う。全国大会に出ていた人の練習と比べられても、ぼくだって困る。お姉ちゃんがすごすぎて、嫌になるぐらいだ。

　部屋のそうじが苦手で、服もぬぎっぱなし。机の上には学校のプリントや教科書が山になっている。お母さんとけんかしたら、ふてくされて部屋に閉じこもる。そんな反こう期のお姉ちゃんだけど、家族みんながお姉ちゃんのピアノの大ファンだ。学校の合唱コンクールでも伴奏者に選ばれたし、ピアノコンクールでもえらい先生にほめられていた。ぼくの自慢のお姉ちゃんだ。

　でも、そんなお姉ちゃんがピアノを辞めた。悩んで、悩んで、お母さんに相談して、ピアノの先生にも話して、他にやりたいことがあるって言って辞めた。ぼくは舞台でピアノを演奏するお姉ちゃんが誰よりもかっこ良くて大好きだったから、お姉ちゃんがピアノを辞めると言ったときは、悔しくて、悲しかった。自慢のお姉ちゃんがいなくなるようで、さみしかったんだ。

　ピアノを辞めても、お姉ちゃんはピアノが大好きだ。そしてやっぱり上手だ。だから、ぼくが弾けないでいると、どこからか飛んできて教えてくれる。お母さんも教えてくれるけれど、いざとなるとやっぱりたよりになるのはお姉ちゃんだ。なかなか上手に弾けなくて怒られることもあるけれど、弾けない気持ちもわかってくれる。ぼくのコンクールの結果を気にして、お母さんよりも先に調べてくれるし、良い結果が出た時は、

「さすが私の弟！　紫文は私より上手くなるよ。」

って、喜んでくれた。お姉ちゃんにほめてもらえることが、ぼくは一番嬉しい。ぼくがもっと上手になって、ぼくのトロフィーをもらえたら、絶対にお姉ちゃんのトロフィーの横においてもらおう。

　お姉ちゃん、ぼくもお姉ちゃんみたいにピアノをがんばるから、お姉ちゃんも今はやりたいことのために勉強をがんばってね。いつもありがとう。